

平成27年度第2回防府市総合教育会議議事録

1 開催日時 平成27年12月22日(火曜日) 午後4時15分

2 開催場所 防府市役所1号館3階第1会議室

3 出席者

防府市長 松浦正人

防府市教育委員会

委員長 小松宗介

委員 清水智恵子

委員 鈴木隆子

委員 村田敦

教育長 杉山一茂

4 説明のために出席した者

学校教育課長 時乗 順一郎 生涯学習課長 福江 博文

学校教育課主幹 岡本 昭彦

5 会議に従事した職員

教育部長 末吉 正幸 教育部次長 赤松 英明

教育総務課長 山内 博則 教育総務課長補佐 片山 裕美

○教育部長 それでは、ただいまから平成27年度第2回防府市総合教育会議を開催いたします。

初めに、防府市長から開催の挨拶をお願いいたします。

○市長 お疲れ様でございます。4月28日に第1回防府市総合教育会議を開催し、年の瀬も押し迫った今、第2回の開催となりました。本日市議会12月定例会も終わったところで、年内の諸案件もさまざまな動きを展開しているところでございます。

平素、教育委員の先生方には本市教育行政の推進のために多大なお骨折りをいただいておりますことを改めて心から感謝申し上げる次第でございます。

私ども市長部局も、先生方の御意見をしっかり踏まえながら、行政の面での教育におけるさま

ざまな課題について、鋭意取り組んでまいり所存でございます。

本日は短い時間ではございますが、防府市の教育向上のため、さまざまな角度からの御意見、御開陳を賜りますようお願い申し上げます、冒頭の御挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

○教育部長 ありがとうございました。

それでは、議事に入ります。議長につきましては、防府市総合教育会議設置要綱第4条第1項の規定に基づき、市長をお願いいたします。

○市長 それでは、ただいまから本日の議題として掲げております「小規模校の活性化について」を上程いたします。私がかねてから、廃校となる学校を作らないという考え方のもとに、あれこれ感じているところでございます。極めて大切な命題でございます。小規模校をいかにして活性化するか、私には私なりの思いもございしますが、まずは事務局より説明をもらって、その上でいろいろ御意見をいただいたらと思います。はい、どうぞ。

○学校教育課長 学校教育課でございます。お手元に、「総合教育会議 小規模校の活性化」という資料並びに富海小中学校、茜島シーサイドスクール事業の資料がございます。

それでは説明させていただきます。

本年4月より防府市内の全ての学校が、美しい学校である、温かい学校である、強い学校であるということで、支援してまいりました。現在、市内にある小規模校の活性化、これを大きな課題と捉えております。

それでは、富海小中学校、野島小中学校、向島小学校の順に説明をいたします。

まず最初に、富海小中学校についてでございますが、現在、在籍児童生徒数は、小学生が59名、中学生が30名の合計89名でございます。このうち小規模特認校を利用して通学している児童生徒が合計で7名おります。7名については、JR並びにバスの半額補助をしているところでございます。しかし、このままいきますと、平成31年度には小学校2年生、3年生が複式になってしまうという可能性もございます。

富海小中学校につきましては、防府市の研究校を経て、小中連携のための英語教育の調査研究、それから文部科学省による研究開発学校、教育課程特例校ということで、小中連携並びに小中一貫についての研究指定を受けて、研究をしているところでございます。

なお、本年度は、校長につきましては、小中学校で1名、小中兼務ということになっております。

一貫教育について、特色ある取り組みとしては、9年間を見通したカリキュラム作り、小中合同の行事、小学校・中学校それぞれの教員が乗り入れる授業、人間関係作りプログラム、小学校1年生からの外国語活動、中学校においては通常週4時間でございますが、富海では週5時間の

英語の授業等々を実施しております。

今後の見通しでございますが、12月5日に説明会を実施したところ、現時点で来年度校区外から就学を希望している者が4名おりますので、今後それに向けて進めていくということでございます。

続きまして、野島小中学校でございます。茜島シーサイドスクール事業ということで、現在中1が1名、中2が3名、中3が2名の合計6名でございます。募集は、小3から中3までですが、残念なことに本年度は小学校が休校ということになっております。

この茜島シーサイドスクール事業は、平成13年度から始まっておりますが、平成25年度には全員が渡船通学者で、いわゆる島の子供がいないという状況になっております。

特色のある取り組みといたしましては、豊かな自然環境、心温まる教育風土に恵まれた野島で心身の成長を図る、あるいは充実した体験活動、島民との触れ合い活動を行っております。また、茜島シーサイドスクールを支援する会ということで400名以上の賛助会員がいらっしゃいます。

今後の見通しでございますが、12月に宿泊の体験入学をいたしました。来年は、現在小学校2年生が1名、小学校5年生が1名、中学校1年生が1名、中学校2年生が1名の4名が希望しております。残念なことに小学校6年生の希望がありませんので、このまま行くと来年度は小学校は復活しますが、中学校は複式となる見込みでございます。

最後に向島小学校についてでございます。現在、児童数は32名、完全複式でございます。

今後の見通しとしては、平成28年度の新入生は今時点ではゼロでございます。平成30年度には児童数が16名、平成33年度には14名と激減する見通しでございます。ただ、その横にある向島保育園には、現在年長が8名、年中が10名、年少が11名ということで、保育園の園児の合計と小学校の6年までの児童の合計が、ほぼ同数になっているということがございます。

何とか児童数の減少を食い止めていき、向島小学校を活性化したいという思いを強く持っておりますが、先ほど説明をした富海の小中一貫教育、野島小中の茜島シーサイドスクール事業、ともにこれは小規模特認校でございますが、向島小学校については、事務局として、例えば保育園と小学校の連携を強める、あるいは学力向上について研究をする、それから、いわゆる暖かい向島ということで、スクール・コミュニティ校区を構築する、食育、あるいは健康を増進する地域にすること等いろいろな案を持っておるところでございますが、どの方向に進んでいけばいいかということをお考えしているところでございます。

以上、説明を終わります。

〔傍聴者 傍聴者に資料がないためよくわからない。との発言あり〕

○市長 いや、大きい声で述べておりますので、よく聞いていただければおわかりになります。

〔傍聴者 再度、資料がない。との発言あり〕

○市長 資料の配付はしないのでしょうか。

○教育部長 資料はありません。

○市長 資料はございません。

〔傍聴者 手元に持っている。との発言あり〕

○市長 これは私たちが審議する資料ですから。

〔傍聴者 それを傍聴している。との発言あり〕

○市長 皆様は傍聴ですから、傍聴しておいてください。

〔傍聴 発言あり〕

○市長 発言を止めますよ。発言しないでください。大切な会議の最中です。

〔傍聴者 市民に目を向けてやりなさい。との発言あり〕

〔発言傍聴者退室〕

○市長 御苦労さまでした。

はい、次。御意見ありましたらお願いします。

ただいま事務局からの説明がございました。富海と野島、そして向島のそれぞれの特色ある教育について説明があったところがございますが、委員の先生方で御意見がありましたらお願いをいたします。どなたからでも結構です。

○教育長 周辺地域などの少子化によって、特に向島小については完全複式という形になっております。来年度は、地元の子が1人いたのですが、残念ながら出ていくということで、小学校児童数が減っていきます。校区を変更することも可能ですが、実は、この校区問題については、以前に話し合いをしたところ、向島に隣接した地域の方たちは、そういう校区の変更を望んでいないということがございます。過去、防府市内で校区を新しく変えようとした際に、地元の方が、それぞれの子どもを通学させないという動きも起きて、校区を変更する際は、地元との協議によって実施して欲しいという提示もあります。

そうしたところで、校区の変更をして向島小学校へ行くということはちょっと難しいということがあります。

ただ、先ほど担当が申しましたが、通学区域を市内全域にする、いわゆる特認校制度ということとは可能かと思えます。その折、どういう特色を出して特認校にするかというのは、また後で協議していく必要があります。

○市長 ただいまの杉山教育長先生のお話ですが、先般、ある会合で、隣接する地域の責任ある立場の方の御発言で、校区の変更はやむを得ない、しっかり地元の協議をするが、行政（教育委員会）のほうでプランを立てて、あるいは計画を示して御提案いただければ、いろいろな面で協力しますというお話もありました。

ですから、今まではいろいろ難しい局面があったのかもしれませんが、現在自動車交通がこれだけ発達し、幹線道路があそこにありますから、そういうところでいろいろな交通災害に子供たちが遭遇してしまうと大変です。そういう子供たちの安全通学という観点からも校区を少し考えてみるということは必要なことではないか、そういう時期であるのかもしれないとも思います。

その辺についていかがですか。小松教育委員長先生。

○委員長 先日集まって、こういう件について話したのですが、例えば本当に校区を自由にすると、逆に市長の方針である廃校になる学校を出さないというのに逆行していくと思います。要するに、例えば、向島にいる人が、私は新田に行きたい、私は中関に行きたいなどです。

○市長 そうではなくて、向島小学校に通う校区を拡大するわけです。このエリアまでは向島小学校ですということです。

○委員長 それもこの前話しましたが、わざわざ、向島に行きますか。

○市長 いや、わざわざではなく、校区はそうなりますという方針です。

○委員長 校区をいきなり広げるのですか。

○市長 いきなりというのか、例えば平成30年なら30年からということです。

○委員長 線を引いて、強引にやっていくということですか。

○市長 それが片方の過疎を防ぎ、片方の過密を防ぐという方法ですね。

○委員長 先ほど出ていた茜島、富海に特徴を持たせている。だったら、向島小学校にも特色を持たせるような方法をとるほうが、まず先だと思います。それで、ここまで来るまでになぜ手を打たなかったかということのほうが問題ですから、市長さんとしては、例えばこの小規模校があって、今後10年後のことを、今検討しているわけですが、もっと前からいろいろな構想があったと思います。それを私たちがなかなか聞く機会がなかった。しかし、こういう総合教育会議が始まったわけですから、市長さんとしての考えをお聞きしたいと思います。

○市長 卵が先なのか鶏が先なのか知りませんが、それはまた議論をいろいろしなければいけないところだろうと思います。

私は単純に校区というものを弾力的に、いつまでも昔に捉われることなく、例えば、向島小の場合、問屋口の内側に大きい幹線道路があります。あれから南側は向島小学校というように行政の方針として打ち出せば良いと思います。向島郵便局は問屋口側に出てきているわけです。だから、私はそう抵抗ないのではないかと考えています。

今の教育長先生のお話で、地域住民の方々が子供を学校に行かせないという随分と大きい運動まで始まるという危惧を申しておられましたが、ある隣接する小学校区の責任ある立場の方が、「それは市役所が決めたら良い。」と、「決めて、そういうことになると言えば、それで良い。私たち協力します。」とおっしゃっていました。

ですから、特色ある教育を施し、自由区にして、どこからでも宮市からでも佐波からでも向島小学校へ行けるように誘導していくのも一つの方法でしょうし、そうではなくて、この線から、今まではこちら側が向島だったが、それを少し拡大して、新田小に通うよりも近い距離にありますよ、こちらのほうが子供たちの負担も少ないですよと話をしていく時期を、もうとっくに過ぎて、むしろ遅きに失しているのかもしれないと思うぐらいですね。

○委員長 まずそのためには、そこに住む人を確保しなければいけないということです。

○市長 今住んでいる方がいますので。

○委員長 向島に行ける方がどのくらいいらっしゃるかわかりません。

○市長 調べたら、今の生徒数よりも2倍程度、約5、60人の生徒が、そのエリアには今でもいらっしゃるようです。

はい、どうぞ

○村田委員 数年前に住民の方に校区に関するアンケートを実施されたことがあるように思いますが、そのときの住民の意見はどうだったのでしょうか。

○市長 はい、どうぞ。

○学校教育課長 年度は24年、47名にアンケートをした結果を申します。

○教育長 どの地区ですか。

○学校教育課長 新田の間屋口で実施したところ、新田小に行きますというのが47人中26人、向島小に行きますというのは2人、無記入が2人で、回答なしが17名でした。もともとそこは新田小の校区ですから、そのまま新田小に行くというのが圧倒的に多い。向島に行きますよというのは、そのときのアンケートで2人でした。

○市長 そうでしょうね。

○学校教育課長 はい。

○市長 今まで学校に行っている人を対象に問いかけるわけですから当然です。それは今までの友達と離れ離れになるなど、いろいろな思いもあります。けれども、私は教育委員会としていつからこうなりますという方針を示していくべきではないのかなと思うのですが。

でないと、片一方は過密状況にあり、片一方は過疎化の状態にあるというのは、どう考えたってアンバランスですから。

私は時々とてつもないことを考えます。例えば、なぜ牟礼小と牟礼南小が隣り合わせにあるのかと。今の牟礼中があるところに牟礼の一つの小学校があり、今の牟礼南小のところに牟礼南小があつて、今の牟礼小のところに牟礼中があれば、牟礼小と牟礼南小の子は全部、牟礼は全部、牟礼中に行くという形ができて、牟礼の地域教育やコミュニティ・スクールの関係など、いろいろな事柄が、すっと落ちていく。

ところが今の小学校区だったら、牟礼小の子は全部牟礼中へ行くけれども、牟礼南小の子供たちは国府中と牟礼中に分かれます。

○教育長 今は牟礼南小は皆、国府中学校へ入っていると思います。

○市長 だから、国府中はまだ過密化状態になっているのではないですか。

○教育長 一時期は、生徒数が増えて、牟礼が分離しました。牟礼小、牟礼南小もいわゆる人口増に伴って分離したのですが、今はまた減少傾向ということです。

○市長 昭和11年に防府町、中関町、牟礼村、華城村が合併をしました。その牟礼村というものが、このエリアですから、一つの中学校があれば一番いいわけですから、どこかで何かは勇気を持ってやらないと、こういうことというのはできないでしょう。

大道にいい例があります。大道は小学校と中学校が全部一緒ですよ。その地域の御協力もうまく合っています。学校給食に行っても、子供たちのたたくまいが良いことを痛感します。小野も小野小の子は小野中に行っています。右田も右田小の子は右田中に行きますね。

○教育長 玉祖小が右田中に行きます。

○市長 全部一緒でしょう。玉祖小と右田小が右田中で一緒でしょう。西浦小と中関小とが華陽中に行くとか、あるいは華西中に行くとかというのはある程度やむを得ない面もあるとは思いますが、可能ならば牟礼は一つというような形が良いと思います。向島小の話とは大分話がずれていきましたが、清水先生、その辺りいかがですか。

○清水委員 牟礼のことは、隣り合わせの小学校なのに中学校は別々になるということは感じていました。また、先日、向島小学校に学校訪問に行かせていただきました。1・2年生、3・4年生、5・6年生が完全な複式学級で1人の先生がお互いの子たちを見るという授業方式だったのですが、本当に大変な様子で、1人の先生が6年生を教えれば、5年生がそれぞれの子供たちだけで答え合わせをするなど、自立はできてくるとは思いますが、子供たちが少しでも増えれば、完全複式学級にはならないんですよと校長先生もおっしゃっていて、どうしたらこの子供たちが増えるのかなと思いました。確かに校区のことも思うのですが、子ども会などの関係もありますので、やはり大きい新田小学校に行きたいという方も多数おられるのは、保護者としても正直なところではないかと思えます。

向島小の方にもいろいろ意見を聞いたのですが、新たな風が欲しい、新たな住居だったり、そういうメリットがないと、どうしても向島には来ないんじゃないかということで、その辺りでいろいろ努力をしていかなければいけないと感じました。

○市長 そうですね。だから、いろいろな努力の中の一つの努力が校区の拡大でもあり、一つの努力が特色ある教育ということでもあるし、あるいは住宅政策、私がよく言っている三世同居住宅を向島にこそ作ったらどうかと。富海の用地買収が思うように進まないなら向島を考えなさい

というぐらいのことを言ったりもしています。喫緊の課題としてとらまえておられるからこそ、今日の議題に上がっているわけですから、我々も喫緊の課題として、これを考えていくことが必要です。

この間、学校給食で向島小に行きました。6年生が6人と5年生が6人、どちらが6年生でどちらが5年生か私が見たらよくわからなかったのですが、一人一人発言をしてもらいました。市長への質問と複式学級についてどう思うかという質問をしたところ何と、12人のうち11人が賛成でした。

その最大の理由は、たくさんだからうれしいと、たくさんだから楽しいということでした。でも、けなげにこういう子たちがいました。5年生のころ私たちはああいう勉強をしたんだなということで復習ができると。それから、5年生の子が、6年になったらああいう勉強をするのかということがわかるからうれしいと。子供たちはけなげなことを言うなあと思いました。

この子供の純粋な気持ちを我々大人がわかってやらなければいけません。それぐらい純粋に、複式というものに対しても、現実を受けとめて、現実肯定の中から楽しさを見出そうという思いがあります。それを我々大人が勝手に、「人数多い方がいいよね。」、「人数少ない学校行ったら寂しいでしょう、だからこっちに来たらいい。」、「こっちのほうがいいのよ。」といった感じや、あるいは「俺も新田小の卒業生だ。」、「お前も新田小だ。」と言うことは親のエゴですよ。やはりその時代その時代に合った校区が弾力的にあることによって、現実には子供たちの同級生が増える、学校が三十何人かではなくて100人になる、その喜びというものは、僕は計り知れないものだろうと思います。

だから、まず行政がやるべきことは、地元の方々に御協力をお願いして、協力するよと言ってくださっているのですから、ここからここまでの線を引くと、1年生が何人、2年生が何人、6年生までいくと何人になりますと。その何人の子供たちに今から説得にかかりたいということで、ぜひぜひ向島小へ転校していただきたいというような動きを出していく。

ただし、それは猶予期間があって、3年なら3年、4年なら4年は弾力的に運用し、今までの学校を卒業したければ、それもよしとする。でも5年後とか4年後には、ここからここを校区にしますというぐらいのある程度の方針がないと、私はいけないのではないかなと考えますが、教育長先生、どうぞ。

○教育長 確かに市長が言われる地元の方のそういう提案もあるということですが、私どもが平成24年、25年に調査したときの区域の地元の方の御提言ですが。

○市長 地元というか、当事者に聞いているわけでしょう。新田小に通っていて、しかも自分たちが考える向島小に行ってくれたらと思うエリアの人たちに聞いたわけでしょう。それはやはりそう言いますよ。それを全ての声と思ってはいけないと思います。

○教育長 ただ私も向島の地域の活性化、これに魅力がないとそちらのほうに行かないのではないかと思います。

○市長 行かないとか行くとかではなくて、非常にうがった表現ですが、教育当事者としてそういう考えがあるのかなと思ったりもするぐらいです。教育に携わっておられる先生からすると、そんな小さい学校に教員を配置したくないとか行きたがらないとか、それはまさかないとは思いますが。だとしたら、やはり地域の活性化のため、あるいは向島小の過疎化現象、新田小の過密化解消のため、しかも子供たちの通学路の安全の確保のためこうしますという方針を明確に打ち出されていけば良いと思います。

○委員長 ここに25年8月27日の調査の結果がありますが、近いところに行かせたいというならば、例えば新田小学校と向島小学校、距離を測ってみて、近いほうがどこか、真ん中はどこかということで比べたら、一つの問題は解決しますね。

○市長 そうです。

○委員長 向島小学校において考えられる特色は、地域との連携であり、地域の方の理解があつて、住む人が増えていくような地域にしていく。そうしないと先々、向島に住んでいる人は子供が誰も向島小に行かないで、新田地区のほうからわざわざ行くというようなことにもなりかねない。やはり今ここで話さなければいけないのは、向島に近いところ、もしくは向島に人が住む、子供が産まれるような夫婦が住む、こういうことも市としては考えていかないと、先ほど一番最初におっしゃった廃校にしないというところはなかなか実現しづらいのではないかと思います。

○市長 ただ、例えば向島に運動公園があるでしょう。それからテニスコートもあるでしょう。サッカーでも野球でも好きにできるだけの広さがあるでしょう。あれは、右田にも牟礼にも松崎にもどこにもありません。あれでも莫大な投資をしているわけです。私は、あの完成を3年か4年早めました。ですから、向島にお金を投じていないということを言われるのは、私はいかがかなと思います。

○委員長 お金を投じていないのではなくて、住む人を……

○市長 住みやすいではないですか。

○委員長 そうですか。なかなか住みづらい。例えば、みんなと一緒に働いている人間が、新天地に飲みいくと、帰るときにやはり一番お金がかかりますから。

○市長 それは小野のほうがかかりますよ。

○委員長 ですから、そういう意味で言えば遠いと思います。

○市長 すごく近いですよ。山越えたら、海を越えたら良いのです。

○委員長 いずれにしろ、ここに書いてあるようなことを実現して行って、住む人を増やすということ考えた方が良いと思います。

○市長 僕は両方やらなければいけないのではないのかなと思います。良いと思ったことを何でも。

○委員長 だから、さっき言ったように、センターからどちらが近いかで決めるのも1つの方法です。

○教育長 ちょっとよろしいですか。

○市長 はい。

○教育長 校区を変えようとしているわけです。人の動きが、今向島から出てきているわけですね、向島郵便局も出てきた。そうではなくて、向島に向かう動きを強制的に作れば、小学校が近いから行こうということになるのではないのでしょうか。

○市長 コミュニティ・スクールからスクール・コミュニティへになってきます。学校が地域を支える、そういう時代に変えていかなければいけない。

○教育長 学校だけではなく産業も含めた、いろいろな意味でのポテンシャルを高める。例えば、小田の港は、幕末に兵庫、大阪を越えて江戸にも行ったというすばらしいところですから、そこを国際観光港として、全国へ、あるいは観光客が来て、防府市内へというのは、魅力を感じると思います。今のままでしたら、確かに運動公園等々ありますが、いまひとつ、よしという気になりません。地元の方を説得していくということもやらないわけではありませんが。

○市長 私は、まち中の人間だから、そういう感覚がないのかもしれないのですが、うちらの子供でも、松崎小に行くよりは佐波小に行くほうが近いのに松崎校区です。遠い遠い、何百メートルも遠いはずです。でもそういう弊害というのは、世の中にざらにあると思います。

それを、意に介さないというか、決まりは決まりだという形の中で受けとめる感性というものも必要です。明治5年か6年にできた歴史のある向島小学校がなくなると、なくなるのは嫌だから、みんなでできることをやろうじゃないかと。「防府市の発展のため、私たちができることは何でしょうか。」という質問をする子供だっています。この間のコミュニティ・スクールの勉強会のときに、中学3年の生徒がゴミを拾って、ゴミ袋を持って学校へ登校するという事例発表がありました。女性の校長先生がおやりになっている。

○教育長 周南ですね。

○市長 周南でやっていらっしゃったけれども、子供たちの中には、そういう感性があると思います。だから、親にもあると思います。それから、若い親たちにもそういう感性を教育していかなければいけないと思います。今、向島を廃校にしているのかと。廃校にしない方法は、あなたのお子様を向島に行かせてくれることだと、向島のほうが近いでしょうと。宮市から自転車に乗って行くというのとは、またわけが違って、新田小よりも250メートル、ここのほうがおたくの場合は近いですよ、おたくの場合には10メートルほど新田小が近いかもしれないけれども、ここを歩いて行くと、通学路は安全ですよと、トラックがビュンビュン走ったりはしないですよと

というような、そういう何かを訴えながらやっていくということは、私は責任の一つではないのかなと思っています。

もちろんそれと同時に、こういう教育がありますよ、こういうような喜びもありますよというようなインセンティブをつけます。このように考えるのですが、またの議論にしましょうか。

○委員長 とにかく特色ある、魅力ある向島小学校、向島小校区にしていくのは、私たちが本気で考えなければ、そこに住んでいる子供たちがそれで楽しいと言えれば少なくともいいのではないかという議論になってしまいます。やはり廃校にしないためには何をすべきかというところで、地元の方々、もしくは地元ではない方々のいろいろな御意見で、本当に魅力ある向島小学校、向島という土地柄をそのように持っていくためにどうしたらいいかということを真剣に考えていかないと、子供がいなくなったら何かしようかというのは、恐らくもう間に合わないと思います。

○市長 そうです。

○委員長 癌でも進行具合によっては、少々の治療をしてもだめになることがあります。それと同じことで、やはり根本的なところから皆で見直しの議論をしなくてはならないと思います。

○市長 例えばいろいろな法規制があるのかもしれませんが、向島に非常に快適なマンションを市有で作り、安い値段でその提供を申し上げるなど考えられます。海が見えて山が見えて、それはいい住環境です。

○委員長 先日も皆さんから調整区域があるが、外すことはできないかとの御意見も出ました。

○市長 今申し上げたようにクリアしなければいけない課題があると思いますが、教育委員会総合教育会議の場にふさわしい議論を今日はしているなと思っています。

○委員長 今日のテーマから外れるかもしれませんが、地方再生のことや、教育に携わってらっしゃる方からはこんな話が出ていますよ、こういうことをやろうと考えています、そういうものをお聞かせいただきたい。

○市長 それは幾らでもありますよ。

○委員長 はい。そういうことを話し合っ、私たちでもできることを各課で検討していく、若しくは委員の中から検討する中に入っていき、何か変えていくというようなことをやっているという状況になります。

○市長 道徳教育が始まることに先立って、道徳基本条例を作った都市もありますし、子供たちの学力をアップさせるためにコンテスト、学力試験で1位から10位までを毎年表彰。表彰状と盾も出しています。「すごいことやっているね。」と言いましたら、「当たり前じゃないですか、陸上競技でも1位ならメダルとか金メダルとか首からかけたり、銅メダルとかやっていないですか。学力だってあったっていいんです。」と言って、子供たちにとってはとても励みになっているのだそうです。そういうような事例発表をいろいろな角度から話し合ったりしてい

ます。

○委員長 そういうことをやはりこういう場で、せっかくだから持ち帰って発表していただくと非常にいいのではないかなと思います。

○市長 今度、そうします。

○委員長 はい、お願いします。

○市長 向島では、けなげにも子供たちはそう言ってくれたのですが、でもやはり多いから複式でいいんだと、12人のクラスなんだという、それがありませんでした。肌で感じました。だから、何とかして増やさないといけないなというのを思います。私自身が痛感したところでもあります。

ですから、いつぞやか調べられたことに余りこだわられずにしかるべき地域の責任ある立場の方が、「そうすべきですよ。」と、こうおっしゃっているのですから。

○教育長 それは責任ある方が実行してくださらないと。

○市長 説得してくれませう。

○教育長 いや、だから、やってください。

○市長 いや、やられたら協力しますと、こう言われます。

○教育長 やられたら、こちらも協力します。

○市長 今度引き合えますか。

○教育長 はい。

○市長 鈴木先生、何かこの件について御意見をいただけますか。

○鈴木委員 先ほど、総合教育会議にふさわしいという表現をされましたが、ふさわしいとすれば、「廃校となる学校を作らない」という市長さんからの命題もそうだと思います。校区に触れることは、鬼門だと考えてきました。少し目からうろこが落ちた気もしますが、防府市内の人の流れ、牟礼小学校の例がありました。いろいろなことを踏まえて、人の流れの中で校区は考えていただければいけない問題ではないかと考えています。教育委員会だけが主導ではできないということも強く思っております。

○市長 そうですね。平成27年の教育委員会法の改正の中で、総合教育会議の設置が規定され、こういった協議の場ができたということは、大きな示唆を与えられているような気がします。避けて通れない課題を避けないようにしようではありませんかということをお互いがやはり認識し合っていくということです。

○鈴木委員 基本的な考え方としては、3校共通していますが、特認校として島外からまた地域外からの子供を増やすだけでは、持続可能な学校というのは無理であろうと思っています。

○市長 無理だろうと思います。私は、危機感を持っているから喫緊の課題として、三世同居住宅を足掛かりに、富海に住む人たちを増やしていきたいという思いを申し上げているわけです。

先ほどの説明では、平成三十何年かには一部複式学級にせざるを得なくなるとのお話でした。

○学校教育課長 可能性があるということです。

○市長 可能性がある。

○鈴木委員 教育委員会学校教育課としては、いろいろな意見を出し、実を上げて取り組んでいただいていると思います。これ以上は考えられないのではないかと思うほどですが、向島にはサイクリングロードがあるそうですし、島全体を観光の島と位置付け、活力あるものにしていくなど、皆がいろいろな立場で持続可能な向島小学校にしていかなければいけないと考えます。

○市長 春には桜があります。

○鈴木委員 サイクリングロードを市広報で取り上げる等、PRをしていくということも必要ではないかと思えます。

向島にあったレストランが潰れてしまったようですが、休日に防府市内の人たちがたくさん行くなど、島全体の活性化というのも大きな課題であると思えます。今日の会議では、教育委員会として、特色ある取り組みということより、学校に魅力を生む取り組みとして出していただいたことについては、とても良かったと思えました。

○市長 ありがとうございます。

今の小学校の現状ですが、富海並びに野島シーサイドスクール、これも非常に危機的な状況にあると思っています。もう島内に子供がいません。

○教育長 それが一番の問題です。こちらの努力だけではどうにもなりません。

○市長 そうです。

○委員長 島民の思いだけではできないことです。

○鈴木委員 市長さんの言われる廃校となる学校を作らないという、そのことに反していると思えます。

○市長 そうです。

○鈴木委員 地域に学校があつて地域が活性化するというを実現するためには船で通学をする子供だけでは難しいことだと考えます。

○市長 私が35年前に市議員になったころには、まだ1,000人からの島民がいらっしゃいましたが、今現実に野島で生活されている方が100人いらっしゃるのか、もしかしたらいらっしゃらないのかもしれない。

そういう現実で、果たして学校があるのがどうなのか。もっと極論を言うならば、10人ぐらいいしか野島に人がいない。だけど廃校にしないからという大義名分の名のもとに学校があるということが果たして許されるのかということです。私のコンセプトは廃校にしないのではなくて、廃校になる学校を作らないということです。そのためには何ができるかということで、富海にも

千何百人、人がいらっしやるわけですし、子供たちも現にいるわけですし、向島にも現に子供たちはいるわけですから、そこをさらに発展させていくことによって人数を増やしていくことが可能ではないか、また可能性が大いにあると思います。

○鈴木委員 そういうことは、学校教育も含めて、自治会も含めて、どこかで協議をする必要があります。

○市長 皆でこの教育総合会議の名のもとに、そういう提案をしていくということも一つの方法かもしれません。

○鈴木委員 協議会で検討されていくべきです。

○市長 向島小学校活性検討協議会のような感じで、向島地域と隣接する新田地域の方々を交えて協議をしていくということは、絶対やらなければいけないことだろうと思います。

以前、あそこにたばこ産業等、工場がありましたが、現在環境が随分変わりました。しかし、そこを私たちはすばらしい公園にして、花の園にしているわけですから住環境としてはそう悪くはないのではないのかなと私自身は思います。

お医者さんもいらっしやいませんが、橋を渡っていけば、たくさんお医者さんいらっしやるわけですから。もしかしたら、うちより便利がいいかもしれません。

○教育長 この度、元J Tの跡地に企業さん来られましたね。その社員住宅を向島あたりに作られたらいかがですか。

○市長 それを私も考えておまして、今度12日に企業の総帥にお目にかかりに上がるのですが、そういうこともお話をしたいなと思っています。

○委員長 それは定住するというのが条件にならないと面白くありませんね。

○市長 そうですか。

○委員長 しかも若い方で、子供も今から生まれるだろう等、いろいろな条件も当然ここに入っていないと、ただ社宅を作って、ここに入っているよ、安く入れるよといって、その企業に勤めている人間だけがその利益を享受するだけであって、何の役にも立たないと思います。

だから、そこにはやはり定住というのが一つの条件で、しかも若い子供たちが育っていく、三世代ですから、お孫さんも一緒に住むということを実行していかないと、また意味がないなということをお前回皆で話し合いました。

これは、教育委員会だけの問題ではなくて、行政も入ったところで検討し、本当に防府のまちはどうしていくのかということを考えていかないと、スクール・コミュニティや、コミュニティ・スクールが今後発展していくのは難しいのではないかと思います。

○市長 全くそうですね。

○委員長 一番考えてらっしゃるのは学校教育課の課長さんだろうと私は思います。私たちの何

倍も言いたいことや、やりたいことがおありでしょう。ところがそれは地元に住んでいらっしゃる方、その地域近郊に住んでいらっしゃる方、そういう方の声を聞くだけでは、なかなか難しいものもあると思います。

○市長 ある程度の方針を出して、それを説明して歩くという努力を私たちはしなければいけないですね。

○委員長 はい。

○市長 私はいくらでもしたいと思っています。

○委員長 以前言ったことがあるのですが、教育委員会、特にまた学校教育課の課長さんは最低5年以上はそこに留まらせることが必要だと私は思います。1年、2年で変わっていくということでは、方針が継続していかない、やはりその人の情熱とかパワーとか行動力、そういったものが変えていくと思います。そういう意味では、今の課長は素晴らしいと私は思います。

○鈴木委員 コミュニティ・スクールに関しては、防府市は先進地だと思います。山口県は来年の4月には100%になるとのことです。既に防府市では、スクール・コミュニティという言葉になっています。習志野市など先進地がありますが、これからはスクール・コミュニティで考えていく必要があると思います。

○市長 この間の公会堂での話で、なるほどなと私は思いましたが、やはり学校の中に、PTAではなくて、PTCA、ペアレンツ・ティーチャー・コミュニティ・アソシエーションというPTCAというような発想がないといけないという御提言を、千葉県かどこか、関東の方がおっしゃっていました。それからこの学校にもコミュニティのハウス、コミュニティ・ルームというようなものが学校の中に部屋としてあるとおっしゃっていました。

○学校教育課長 全部ではないですが、本市もあります。

○市長 地域開放という言葉ではあるのですが。

それから、こういうことも頭の中に入れておいていただきたいと思います。私は畳を学校の中に敷いて欲しいと思っています。できたらそこにふすまもあり、あるいはそこに花も活けられるような床の間もあり、できたら炉を切って欲しいと思います。そういうことによって、ふすまの開け閉め、あるいは畳での作法、あるいはお花に対する心、掛け軸の掛け方を学ぶことができる。恐らくほとんどの家庭がもはや掛け軸の掛け方さえわからない状態になっているのではないのでしょうか。昨日安倍総理の秘書官がついて、日本舞踊の花柳の先生方が来られました。

○教育長 はい、新田小の村上恭子校長です。

○市長 新田小の村上恭子先生、立派な校長先生です。あの方が花柳の名取さんですね。一緒についてこられて、正式教科で、教科でないクラブ活動でそういうことを教えてもらえる。日本舞踊を体育館の床の上で行うのは、余りにも味気ないと思います。舞台だと言えば、それまでですが。

ですから、畳の部屋を作って子供たちが正座をして、たまには静かに黙想するとか読書をするとか、こういうこともひとつの情操教育ではなかろうかと思えます。

今日は、「防府市の学力向上について」ということを2番目の議題として予定しておりましたが、このことについては、先ほど申し上げたように、学力コンテストをやっているという地域、市長名で表彰しています。そういうのも良いのか悪いのかは別として、私は子供たちの向上心を煽っていく上においては大切なことではないかと思えます。やはり学ぼうという意欲、学んでも学ばなくても、何も別に関係ないというのでは夢も何もないと思えます。努力したら努力したように、皆の前で拍手を浴びるというようなことがあって良いと私は思います。

その辺も含めて、次回の協議のときには、こういうふうにしたらいいのではないかというような先生方の意見をお聞きしたい。もっと宿題を倍にする運動をするなど。(笑声) 私はどこの学校に行っても、テレビを見たり、テレビゲームをやったり、兄弟で何となくふざけて過ごしてしまう時間と、本を読んだり勉強したりする時間、どちらが長いかと聞きますが、まず本を読んだり勉強したりするほうが長いという返事をする生徒は、多い学校で3割、少ない学校になると5%です。計画表を持っている人は手を挙げてくださいというと、多い学校で1割、少ない学校は1人か2人、中にはゼロ、そういう状態です。

ですから、「校長先生に頼んで、宿題を3倍にしてもらおうね。」と言ったら、「うおー」と皆怒りますが。それだけ暇なんだろう、テレビを見てるんだろうなどと言って、私は茶化して帰りますが。

やはりそういう姿勢がないといけません。僕らの小さいころにはランドセルなんて持ってない子供がたくさんいました。今はランドセルのない子供なんていません。勉強机だって皆持っています。私らのころなんてちゃぶ台を上手に早く片づけて、兄が先か私が先かという感じで、ちゃぶ台で勉強しました。あるいは古い机をいただきときのあのうれしさを思い出します。

では、このあたりでよろしいでしょうか。

本日は、実り多い会議でした。

○教育部長 ありがとうございます。

○市長 またよろしく願いいたします。

○教育部長 次に、その他の事項ですが、特に事務局からはございませんので、皆さんのほうから何かございますでしょうか。

ないようなので、以上をもちまして、第2回防府市総合教育会議を終了します。

次回は来年の4月あたりを計画いたしております。よろしく申し上げます。お疲れさまでした。

午後5時24分閉会